私から見た土地改良

泉谷満寿裕（いずみやますひろ）

珠洲（すず）市長に聞く

日本海に突き出た能登半島の先端に位置する珠洲市。高齢化と人口流出に直面する条件不利地域において、里山里海の豊かな資源を生かし、「食」を中心に農林水産業の振興と交流人口の拡大を組み合わせて、地域活性化を進めている泉谷満寿裕市長から、「人口減少との闘い」についてお話を伺った。

聞き手●角田　豊
（一社）土地改良建設協会広報委員長
（株）竹中土木　顧問

写真右　泉谷満寿裕氏　写真左　角田　豊

角田　今日はお忙しいところご協力いただきありがとうございます。

泉谷市長は、二〇〇六年に市長に就任されてから「人口減少との闘い」を前面に打ち出して市政の運営をされてきました。本日は、地域振興や活性化など市長の取り組みをお聞かせ願えればと思っています。まず、最初に市長に就任されるまでのことについてお伺いします。珠洲市でお生まれになったと承知していますが子供時代や学校時代どのように過ごされていましたか。

泉谷　珠洲は自然に囲まれていますので小学生の頃は、放課後はほとんど外で遊んでいました。釣りが好きで、小学校五・六年生の頃は、学校が始まる前に友達と一緒に釣りに行き、終業してからまた釣りに行っていました。高校は金沢で過ごし、大学は東京に行きましたが、珠洲を離れている間に、地元の鉢ケ崎海岸で泳いでいる夢を結構みたりしていましたので故郷への想いはずっとあったと思います。

角田　そうしますと、中学校までで珠洲を離れられたのですね。

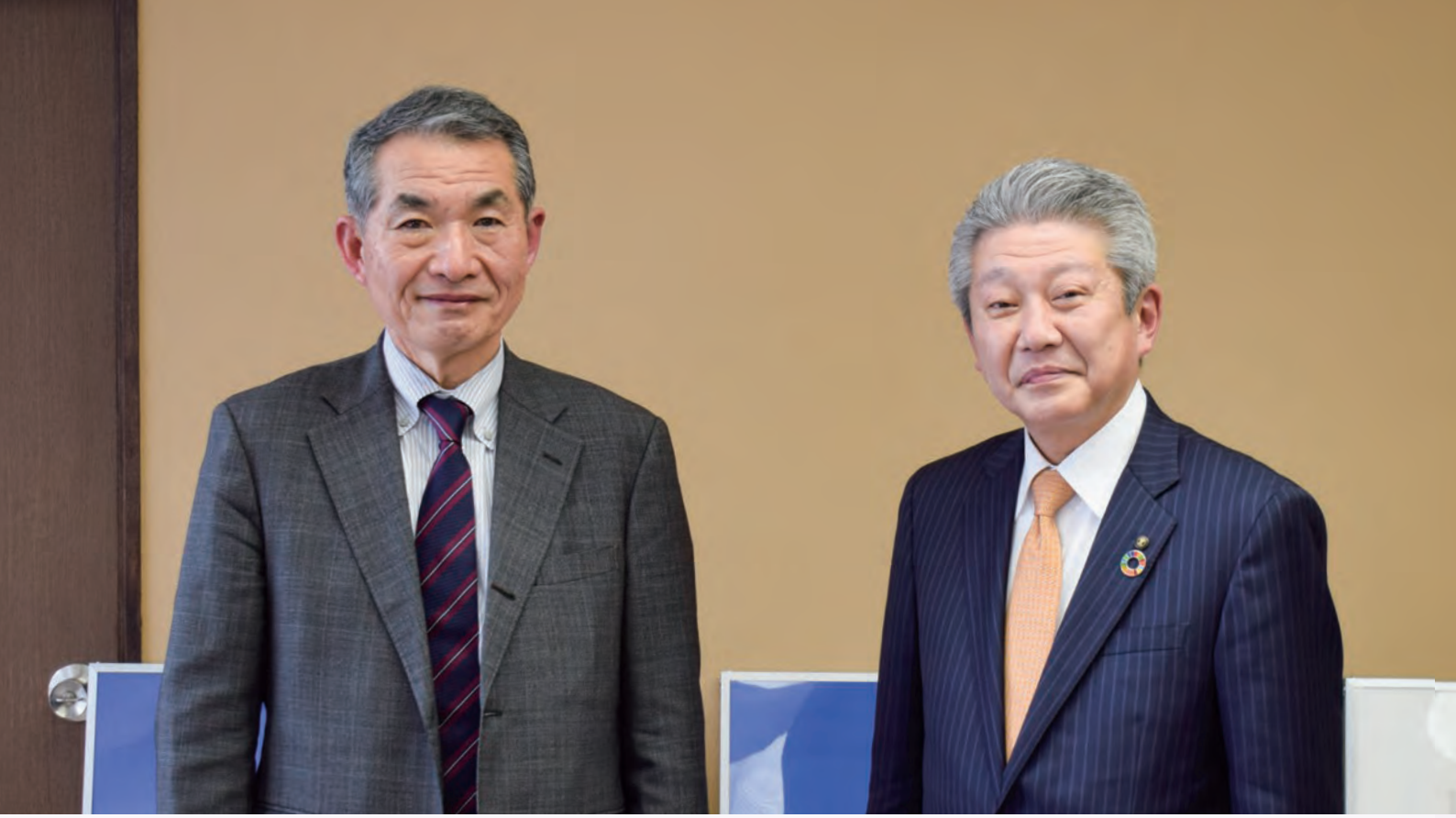
泉谷　そうです、親が色んな面で厳しかったので束縛から逃れたいと思っていました。進学校の金沢泉丘高に合格できれば家出ができると思って、親に受験させてくれと願い、合格して家を離れることが出来ました。その当時は、珠洲への愛着の想いと相反して一寸離れてみたいとの想いがありました。

角田　大学は早稲田大学ですね。

泉谷　早稲田大学では政治経済の政治を選択しましたので、どこかで政治のジャンルで珠洲に何か貢献できればとの想いはありました。ただ、その時は首長の選択はなかった様な気がします。結局は家業の長男として生まれたからには、何れは珠洲に帰らなければいけないとの義務感みたいなものが子供のころから刷り込まれていたのではと思います。

角田　帰るタイミングはどの様に決められたのですか。

泉谷　大学を卒業して野村證券に八年勤めて三一歳の時に帰ってきました。野村證券に入ったのは、一つには経済を体で覚えたい、理論的な勉強ではなく実践的に学びたい、また、日本一厳しい会社と言われていましたので、入ったらどうなるのかと好奇心がありましたね。実際、入ったら大変でしたね。新しい顧客の開拓とかクレームへの対応とか色んなことがありました。あの八年間があったから大抵のことは耐えられますね。自分が入社した時は昭和六十二年でＮＴＴ株式の売出しの時期でした。そこから絶頂期を迎えて、バブルが弾けましたが、バブルが弾けたところで辞めるのも負けた様な気がするし、それを乗り越えてからじゃないと辞めちゃいけないという気持ちが自分自身にあって、ズルズルと八年居ました。人事のシステムがガラッと変わったことをきっかけに踏ん切りをつけて



珠洲に帰ってきました。女房には、慣れない土地に移ってきて大変苦労をかけたと思います。

角田　珠洲に戻られてしばらくは家業に専念されたのですか。

泉谷　そうですね、家業（泉谷菓子舗）もありますし、青年会議所とか能登空港の開港に向けたＮＰＯ活動もやっていました。東京から飛行機で能登に降り立った方に対して、輪島や珠洲など能登で何か出来る事は無いかと地域おこしの活動を色々とやっていました。

谷地田の景観

角田　そういった活動が政治の方に繋がって行くわけですね。

泉谷　そうなのですが、三一歳で帰ってきて最初に市長選に挑戦したのは三六歳でしたがあっさりと落選し、六年後の二〇〇六年に初当選しました。当選後のあいさつ回りで金沢市長（当時）の山出保（やまでたもつ）さんにお会いした時に「泉谷さん、私はあんたには敵わんわ」と言われて何のことかと思ったら「泉谷さんは選挙で一回負けてるから」と続けられて、凄くじーんときました。今でも印象に残っていますね。落選を経験すると、天狗にならないとか、地域で望まれる人間は何かとかいろいろ考えるので、山出さんはそういうことをわかっていらっしゃったのだと思います。

変えよう珠洲、変わろう珠洲
―珠洲の潜在力を生かした地域づくりを目指す

角田　珠洲市の人口は昭和三十年の三万八千人から、現在一万三千人まで減っている状況です。「人口減少との闘い」と掲げられたお気持ちをお聞かせください。

泉谷　最初の選挙の時のスローガンは「変えよう珠洲、変わろう珠洲」でしたが、珠洲市は財政破綻するのではないかというくらい厳しい状況でしたし、人口減少も止まりませんでした。本当に厳しい時でしたね。初当選した時は、スローガンの「変えよう珠洲、変わ

ろう珠洲」を小学生やおばあちゃんまで口にする様な感じでしたね。地殻変動しているような状況で六年前の自分とどこが違うのかと思いました。よくぞ出てくれたと言ってくれる人がいたり、山間で、おばあちゃんが道で正座して拝んでくれたり、子供たちがスローガンを大きな声で叫んでいたりなかなか凄い選挙でしたね。そういう時の気持ちを忘れてはいけないと思い、今年の新聞の首長の年頭挨拶ではテーマを「更なる変革」としました。厳しい自治体はただ守っていくだけでは発展どころか維持することも難しいと思います。常に変わっていかなければいけないと思います。

私は市長に就任して、自分が政治家だと思ったことは一度もなく、地域経営者だという想いで一貫して取り組んでいます。そうしますと、どの資源をどう生かしていくかが重要になります。一番大事なのは人ですが、歴史や伝統文化あるいは農林水産資源の田んぼや景観など、色んな資源をどう上手く活用していくかです。珠洲市は潜在力がものすごく高いと思いますので、色んなことを具現化していく中で活性化が図られるのではないかと思い、突拍子もない事をやるのではなく、潜在的な力を引きだすことを考えて取り組みました。そこで、珠洲の魅力、強みは何かと考えた時、食じゃないかと思いました。残念ながら珠洲には氷見のブリや越前のカニみたいな代表的なものは無い。しかし、珠洲には何でもあり豊かですので、食が一番の強みだと考え、食を中心に農林水産業の振興と交流人口の拡大を組み合わせて活性化を図って働く場を増やし、移住・定住に繋げようと考えたのが原点です。

「道の駅」が最初の取り組み

角田　今日、道の駅「すずなり」に寄りましたが、珠洲の色々な農産品が販売されていました。世界農業遺産「能登の里山里海」で「能登の一品」四〇品目をブランド化し売り出していますが、この中には珠洲の産品が相当数入っていますね。

泉谷　廃線になった能登鉄道の珠洲駅の駅舎を利用して道の駅「すずなり」をオープンしたことによって、新商品の開発も進みました。私が市長になってから、道の駅「狼煙（のろし）」、道の駅「すずなり」、宿泊施設「木ノ浦ビレッジ」などを整備しました。また、道の駅「すず塩田村」の物販スペースを増築した時にはＮＨＫの朝ドラ「まれ」が始まりタイミングが良かったです。日本の朝が珠洲の狼煙の灯台の映像から始まるなんて毎朝が楽しくて仕方なかったです。

狼煙のことについて話をすると、もともと狼煙地区は能登半島最先端に位置していて禄剛埼（ろっこうさき）灯台（狼煙の灯台）があって、私が子供のころは能登

禄剛埼灯台（狼煙の灯台）　明治16年（1883年）設置

道の駅「狼煙」

半島ブームでにぎやかなところでしたが、私が三一歳で珠洲に帰ってきたときにはすっかり寂れていて愕然としました。そういう状況の中で、地域の方が珠洲の在来品種である「大浜大豆」を使って何かできないかと考え、毎年二月に行われる食のイベントで、大浜大豆を使った「藁づとの納豆」や寄せ豆腐を食べてもらったりしていましたが、評判がよく、飛ぶように売れていました。これを一年間通して販売してはどうですかと持ち掛けたところ、地元の方は隣の輪島市の豆腐工場に行って豆腐の作り方を一から勉強して株式会社を立ち上げるまでになりました。行政は農林水産省や県の補助を受け、道の駅「狼煙」を整備するといった取り組みで地域の拠点を作り上げていきました。

道の駅「狼煙」がオープンした時に、再び狼煙の灯台に続く坂を上り下りする人波が出来まして、それを見た時に感動し、やれば出来るのだなと思いました。地元の方たちの頑張りがあったと思います。道の駅が出来る前は狼煙の皆さんからは「市長、もう田んぼ止めるから土地改良からも抜けたい」と言われていましたが、道の駅が出来て、来客が増えて、売上も順調に伸びたところ、地元の方たちは自分たちが作ったコメを売ろうと、精米したての美味しいコメをアピールするため、本格的な精米機を買い、観光客に「坂を上って灯台を見て来てください、その間に精米しておきますよ、精米したてのコメを食べたことありますか。」などと話しかけたところ、大いに売れて、自分たちの食料として倉庫に保管していたコメまで売りだすような状況で、地元からは「市長、土地改良でほ場整備してくれ」と以前とは一八〇度違う状況になりました。ほ場整備を行ったところ、今は跡継ぎの若い人が帰ってきて営農しています。

すず塩田村　日本唯一の揚げ浜式製塩

大浜大豆を使った豆腐製品各種

農業の活性化が地域の元気に

角田　農地の集積や規模拡大もかなり進んでいるのでしょうか。

泉谷　そうですね、市役所の退職者が農事法人に入ったりして担い手が増えています。若い人も戻ってきています。能登は「キリコ祭り」が有名ですが、若い人が少ないとキリコを出せないのです。狼煙町の隣の横山町のキリコが久しぶりに出るようになりました。伝統的な地域の祭りが復活したわけです。両町は、道の駅「狼煙」の運営を一緒に携わるようになり上手くいっています。

角田　やっぱり農業の活性化が地域の元気にもなっているのですね。

泉谷　もともとの観光地が復活しただけでなく、地域が変わりますね。道の駅「狼煙」では自分たちが作った作物を持ち寄って直接売っていますが、今はポスシステムで販売状況がスマホなどで直ぐ

わかり、今日持ち込んだ大根一〇本が残り五本とか随時情報が入るため、例えばグラウンドゴルフしている場合じゃなくなるわけですよ。地域の精神的な面も含めた本当の活性化が進んでいると思います。道の駅の最初の出資金も五年ぐらいの配当金で既に還元されており、凄いことだと思います。さらに、集会場のトイレなどを会社の寄付で整備したとか、自立したコミュニティビジネスといいますか地域での経営が成り立っています。

まずは道の駅「狼煙」で地域を上げてのビジネスが上手く立ち上がって、翌年には道の駅「すずなり」が出来て、新商品開発が進んだり小さな生業が生まれたりと活性化に繋がりました。そこには農林水産物の活用が有りますよね。

500年を経て復活した中世の古陶・珠洲焼

角田　そういう交流の場とか産品を出せる場が出来る事によって地域の農業が刺激を受けているんですね。

泉谷　食を中心にした取り組みを進めている中で、二〇一一年に世界農業遺産に認定されまして、付加価値を高める色んな可能性が出てきました。能登棚田米のブランド化など「能登の一品」に続く更なる展開が必要だと思います。

移住者が増えてきた

泉谷　なぜ最初の取り組みが狼煙だったのかと言いますと、地域の方たちの危機感が凄かったと思います。私自身もあれだけ賑わっていたのにこんなに寂れてしまったという落差に驚いて狼煙をなんとかしたいという想いでした。取り組みは正解だったと思います。狼煙は珠洲市の中でも人口減少率、高齢化率が一番厳しいところでした。そこから活性化の取り組みをスタートさせたことは理に適っていたと思います。

今ではこの地域が移住者が一番多いです。狼煙の区長さんの話では六年間に残念ながら八名が亡くなられたが八名が移住してきたということです。二〇世帯の川浦地区では空き家三軒が移住者で埋ったとか、山間で人口減が激しい東山中地区では、製炭業の大野長一郎さんが頑張っていますが、そこに若い夫婦が炭焼きの修業をするため移住し、先日赤ちゃんが生まれたとか、折戸地区では金沢の美容室が店をオープンして大変好評で完全予約制なのですが常に埋っているそうです。お店は全面ガラス張りで目の前に海が見えるお洒落な造りです。自分が市長になった時には想像もしていなかった変化となっています。

東京の一部上場企業が珠洲に本社機能を一部移転

泉谷　昨年、東証一部上場企業のアステナホールディングス株式会社が本社機能の一部を珠洲に移転しました。きっかけは「木ノ浦ビレッジ」のオープンでした。昭和四十年代に流行っていた国民宿舎木ノ浦荘は、市長になった時には老朽化が著しく維持が出来なくなり閉めました。色々と議論を経て、家族やグループが利用しやすいコテージ型の宿泊体験施設として二〇一四年の夏にオープンしました。アステナホールディングスの岩城慶太郎社長は、木ノ浦ビレッジのオープン時から時々利用していたそうです。コロナ禍になってからは社内の勤務体制がテレワークとなったことから、木ノ浦ビレッジで長期間滞在し、珠洲でのテレワークで支障がないことを実感し、昨年の六月に本社機能の一部の移転を正式に決めていただきました。社長をはじめ、関係社員が家族で移住していますし、サテライトオフィスやメールセンター、社員寮などとして使うため、珠洲市内の空き家を改築するなどの整備をしていただいています。

角田　私も先般の世界農業遺産国際会議で岩城社

長とご一緒しましたが、能登に対する愛着と地域活性化に対する意欲を感じ、強いインパクトを受けました。岩城社長がこの珠洲から発展させていくであろう新たなビジネスに期待しています。

では、珠洲市における人材の育成に対する取り組みについてお伺いします。

金沢大学と連携した人材育成をベースに多様な地域振興策を展開

泉谷　二〇〇六年に市長に就任して間もなく、金沢大学の関係者が来られ、珠洲で自然学校を創設したいとの話がありました。廃校になった小泊小学校の空き校舎を紹介したところ金沢大学「能登学舎」として開設し、翌二〇〇七年には能登で活躍する人材を育成する「能登里山里海マイスター育成プログラム」が始まりました。この一〇数年で二〇五名の修了生が巣立ちました。珠洲で製炭工場を経営する大野長一郎さんや、生物多様性アクション大賞を受賞した「まるやま組」を主宰する萩のゆきさんも修了生です。こうした人材育成をベースに地域の付加価値を高めていく取り組みを進める中、二〇一一年に能登の世界農業遺産の認定があり、そこから生き物観察会が始まり、二〇一七年に奥能登国際芸術祭を開催、二〇一八年には「SDGs未来都市」に認定されるなど、様々な取り組みが次々と繋がってきたと思います。

角田　奥能登国際芸術祭は全国紙でも紹介され大きな注目を集めました。大変ユニークな取り組みだと思いますが、芸術祭を招致されたきっかけは何でしたか。

泉谷　商工会議所と珠洲市選出の県議会議員が北川フラムさんのアートフロントギャラリーに伺ったのが最初で、私がお会いしたのが二〇一三年一月、その年に第二回瀬戸内国際芸術祭がありましたので、直接、現地に行き自分の目で見てアートの力を実感しました。空き家・空き店舗が大勢の来場者にランチを提供するお店になっていたり、レンタサイクルの店になっていたり、どんどん地域が変わっている様を見て、珠洲でも開催できればと思いました。しかし、瀬戸内国際芸術祭のスタッフは二〇〇〇人を超えると聞いて、予算もさることながら人の少ない珠洲で出来るのか不安でしたが、開催して珠洲の魅力を十分に発信することが出来たと思います。また、おもてなしをする地域の皆様も凄かったです。山間の地域では住民がボランティアで小さなジャガイモを塩ゆでして無料提供し、マスコミの方が「なんでそんなにするのですか。」と聞くと「この在所にこれだけ多くの県外ナンバー来るのは初めてや。」と嬉しく語る姿がニュースになっていました。使用したジャガイモは六〇〇〇個だそうです。私は、見返

スズ・シアターミュージアム　廃校の体育館が丸ごと「モノの劇場」となった

スズ・シアターミュージアム　地域の蔵や納屋に眠る生活用具を集めて展示（大蔵ざらえ）

りを求めない珠洲って良いところだなと思いましたね。珠洲へのふるさと納税に際し、「芸術祭を応援しています」とのコメントが多く寄せられ、珠洲のファンが確実に増えてきたと思います。二〇一七年の芸術祭では七万人程が珠洲に来られ、アートの力の凄さを感じました。珠洲の魅力を言葉で伝えようと思っても難しいところが有りますが、芸術祭は地域の伝統、文化、歴史、魅力を一目瞭然で表現してくれます。

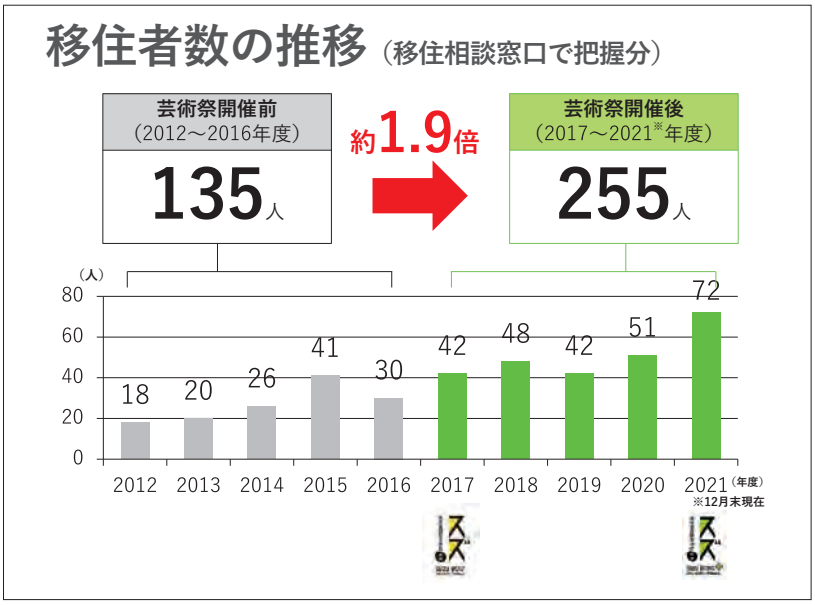
トリエンナーレとなる第二回芸術祭を三年後の二〇二〇年に企画し、宿泊施設や飲食などの店舗も増やしたいと考えていました。新型コロナの流行で難しくなりましたが、第二回芸術祭は二〇二〇+として二〇二一年に開催できました。コロナ禍での開催に批判もありましたが、感染対策を万全にして臨みました。「スズ・シアター・ミュージアム」が他には類のない劇場型歴史民俗博物館として評判になり、開催出来て良かったと思います。芸術祭で多くのアーティストや全国からの来客を目にし、地元の皆様も珠洲を誇らしく思う様になり精神的に変わってきていると思います。

「人口減少との闘い」の成果

角田　これまでの様々な取り組みで人口減少に対する効果はどうですか。

泉谷　十二月議会で芸術祭による人口減少に対する効果はどうなのかと質問がありました。調べたところ芸術祭前の二〇一七年以前の五年間の移住者は一三五人、その後の五年間では二五五人と倍近い移住となっています。（グラフ参照）

また、二〇二一年度の上半期、四月～九月の転入者数が一三一、転出者数が一二〇で一一人増の転入超過となりました。二〇〇六年に市長になって以来、初めてのことです。ただ、珠洲には大学がないので三月には進学とかで転出人口が多くなります。一年を通して社会増減がプラスになるよう取り組みを加速していきたいと思っています。



珠洲の暮らしをよくする

角田　農水省では、仕事、暮らし、活力を三本柱とする新たな農村政策を打ち出していますが、珠洲市の取り組みはそのまま政策の具体化になっていると感じます。暮らしの面では、情報基盤の整備や地域コミュニティの維持についてはいかがでしょうか。

泉谷　珠洲市の地域コミュニティはしっかりしていると思います。皆さん本当に支えあっていると思います。そうはいっても、能登半島の先端にあって金沢からは遠く大学や短大も無いため、若い人は外に出て行って帰ってこないなどハンディはあります。それを埋めてくれるのがデジタル通信だったり、移動であったりだと思います。珠洲にいながらにして色んなことが不便なくできればそれに勝るものはないと思います。これからはデジタル田園都市国家構想に上手く呼応して、市民の皆さんの暮らしを便利に出来ればと思います。

珠洲市では住民サービスの一つとして無料の路線バスを今年三月から走らせることとしています。さらに、スマホやタブレットで買い物支援などが出来ればいいと思っています。また、光ファイバーは市の中心部だけでしたが、移住・定住促進のためには必要不可欠ですので、コロナ対策の国のスキームを利用して市内全域で整備をしました。あと、マイナンバーカードの交付率は全国約一七〇〇の自治体の中で一一位です。

スピード感のある行政

角田　コロナ禍をきっかけにしてデジタル化を一気に進められたのですね。

泉谷　あとは、機敏にコロナ対応の地方創生臨時交付金で直接給付やプレミアム付商品券を出したり、色んなことを組み合わせながら行っています。大型のプレミアム付商品券で市民の消費意欲を刺激し、市内の全業種に好影響が及ぶようにしたいと思っています。

今年に入ってからも、一月四日の仕事始めに関係課長を集め地方創生臨時交付金の使い道を議論し、一月六日には予算書や臨時議会の提案説明書を仕上げ、一月十三日には臨時議会で可決されました。また、コロナで困っている珠洲市出身の学生約二五〇名に一〇万円を支援することにしました。新型コロナウイルスの三回目接種も一月二十四日から本格的に初めて、三月中には終わる予定です。

角田　珠洲市出身の学生に対する支援は、故郷意識を蘇らせることに繋がるユニークな取り組みですね。市長のお話を伺っていると、政策を打出すときは職員の方々との意見交換を頻繁に行って合意形成を図っている様に感じますね。

泉谷　そうですね、機敏に行っています。何か懸案事項があったら関係職員を応接室に集め、二〇分から三〇分の議論で重要政策を決めていく感じですね。

角田　自治体がどう取り組むかで地域振興の観点から見ると相当の差が出てきていると思います。

泉谷　珠洲市の政策の決め方や行政の動きはスピード感があると思います。珠洲市は市長、副市長、課長のフラットな組織です。何かあれば私が担当課長の机に行き話したりしていますので、課長の上に市長がいるというよりは、課長の隣に市長がいるという感じですね。

「SDGs未来都市」がめざすもの

角田　二〇一八年に内閣府の「SDGs未来都市」に認定されました。どのような取り組みに重点を置かれていますか。

泉谷　「SDGs未来都市」にエントリーした一番の目的は「能登SDGsラボ」を立ち上げることにありました。二〇〇七年から金沢大学と連携して進めてきた人材育成事業（能登里山里海マイスター育成プログラム）は、今や修了生が二〇五人になっています。しかし、修了生を地域で活かしきれているかというとまだまだ足りないと思っています。修了生がもっと地域に定着できるよう、新しいビジネスを生み出したり、既存企業がもう一段脱皮する必要もあるでしょうし、或いは新しい商品開発も必要でしょうし、色んな面で産・官・学に金融も連携して取り組むプラットフォーム機能を持つのが「SDGsラボ」です。これを金沢大学「能登学舎」に設置したのです。

角田　核心になるものがあったわけですね。「SDGsラボ」を創っていくという。

泉谷　アステナホールディングスの岩城社長は、人口が減少し、高齢化率の高い珠洲市でSDGsの観点から採算の合うビジネスを起ち上げることができたら、これは日本全国どころか世界中に通用するものになるのではないか、具体的にファンドを創設し、そういう新しいビジネスを生み出せれば、ということで「SDGsラボ」に興味を示していました。珠洲に本社機能の一部を移された背景としてそうしたこともありました。

SDGs未来都市に選定されたことを契機に、小学校の高学年と中学校ではSDGs学習も行っています。これは素晴らしい内容です。さっき申し上げた市内路線バスの無料化も、持続可能なま

ちづくりの観点から一〇年後の珠洲市の交通はどんな形なのかを検討して判断しました。

ＳＤＧｓの考え方である多様性とか、物や食べ物を大切にし、水・土という資源を活用して農業を持続してきたというのはもともと珠洲本来の特徴でもあり、色んな意味で珠洲市はＳＤＧｓ的だと思いますね。

角田　世界農業遺産とＳＤＧｓは非常に親和性が高いですね。

泉谷　そうなんですよ、だから世界農業遺産の取り組みをＳＤＧｓの観点から見つめなおして進めていくことは絶対必要だと思っています。珠洲の場合はアートもくっつけちゃうということなのですけど。先般の世界農業遺産国際会議のシンポジウムで草野満代さんが世界農業遺産にＳＤＧｓとかアートとかを組み合わせていくっていうのは凄いですよねっておっしゃっていましたので心強く思いました。総合的に取り組んでいくことが大事だと思いますね。世界農業遺産の認定の後、生物多様性保全の取り組みや、廃食用油の回収を地域の公民館単位で行い、バイオディーゼルに再利用したりしましたが、ＳＤＧｓと結びついていきますね。また、地区ごとに道端の草刈りや海岸の漂着ごみの回収など美化活動をし、エコポイントを集めそれを商品券に交換するようなことも実施してきましたが、そうした地道な取り組みがＳＤＧｓと重なるんですよね。子供たちの生き物観察会も面白いですよ。生き物観察会で直播の田んぼに住んでいる生物と普通の水田の生物との違いを発見したりとか、それを春・夏やるんですよね、学校によって色んな取り組みがあるんですけど、発表を見ていると面白いですね。

能登でのトキの放鳥をめざす

角田　最後に、世界農業遺産を通じた佐渡との連携や交流についてお願いします。

泉谷　二〇一一年に世界農業遺産に能登と佐渡が同時に認定されてからずっと交流しています。佐渡を訪問して、トキと共生できる環境づくりを見てきました。水田に魚道とか江を設置するとか、化学肥料や農薬を減らす農法とか、現地に行って実際取り組んでいる方のお話を聞いたり、生き物観察会のこととか、子供たちの交流も行ってきました。

今、国は二〇二五年に本州でトキの放鳥を計画しています。是非、能登も手を上げたいと思っています。トキですから珠洲で放鳥しても珠洲に居つくかどうかはわかりません。そうなると広域的にトキの餌になる生物が生息できるような、トキが暮らしていける環境を作っていかなければいけないと思います。これは能登が世界農業遺産の次の一〇年を目指す上での柱になると思うんです。能登の四市五町が共通の分かりやすい目標を持って取り組むがことが良いと思います。それがＳＤＧｓにも繋がると思います。

角田　本日は、農村地域振興に関する多角的な取り組みについてお話をいただきありがとうございました。

（インタビュー　令和四年一月二十四日）

泉谷（いずみや）　満寿裕（ますひろ）

1964年石川県珠洲市生まれ。1987年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。同年、野村證券株式会社に入社。1995年4月に退社し、家業の泉谷菓子舗を継ぐべく珠洲市に帰る。青年会議所やNPOを通し、地域おこし活動に傾注。その後、NPOすず交流ビューロー理事長、珠洲生必株式会社社長などを経て、2006年の珠洲市長選挙に初当選。能登半島の先端に位置する珠洲市において、少子高齢化と人口減少が著しく進む中、移住・定住の促進に向けて、地域のあらゆる資源を活かし市民と行政がともに取り組む「地域経営」を推し進めてきた。さらに、珠洲市の魅力を高めるために、2017年秋と2021年秋に「奥能登国際芸術祭」を開催。現在4期目。